

はじめに

「ページをめくるたびに自分の胸が熱くたぎっていることを感じ、気づいたら自分も『同性愛者としての生活』をもちたいという気持ちがいってきていた。自分のなかの負の感情が消えていたのだ」(本書21頁より)

本には不思議な力があります。それはたとえば、道に迷ったときに、行き先を指し示す道しるべの星のような力です。

「先生に呼ばれて相談室に入って、パーッと横見たら、セクマイ関係の本がブワッと並んで。『本、メッチャ並んでるやん』と思って。『おお、おお!』って思いました。せやったらもうカムアウトしてもいいかなあって思った。本がブワッとあるし、この人は勉強してくれてはんのかなあって思った。それってでかいなあって思いました」(本書執筆者のひとり、堀川ユウキの言葉)

本には不思議な力があります。それはたとえば、人と人をつなぐ^クもやい^クのような力です。「家に帰って、その本を読みました。読みながら、何度も身体がふるえる思いがしました。当事者の経験談やルポに書かれていることは、わたしにとってはしよせんは『タニンゴト』でしかありませんでした。しかし、その本に書かれていることは『知識』でした。その『知識』に照らしあわせながら自分を見つめたとき、『あてはまること』『あてはまらないこと』がクリアに見えてきた気がしたのです」(土肥いつき『ありのままのわたしを生きる』ために『より』)

本には不思議な力があります。それはたとえば、自分のまわりにあるモヤをふりはらう太陽のような力です。

本書は、そんな本のもつ不思議な力に魅入られた46人の執筆者が、それぞれ自分と本の間で行った対話をあらわしたものです。

近年、LGBTへの理解は、少しずつ進みつつあります。しかし、それらが一人ひとりのL／G／B／Tの生きやすさにつながっているとは、まだまだ言えない状況です。たとえば、カミングアウトは依然として困難です。そのため当事者自身、隣にいるかもしれない「なかま」を見つげにくく、孤立感のなかに置かれています。また、非当事者にとっても、LGBTのことは遠い世界のできごとと考えてしまいがちです。しかし、「私たちはもうすでに一緒に生きている」のです。「ともに生きる」ためには、まず「知る」ことが必要です。本書は、「多様な性」を生きる人々が育んできた豊かな歴史や文化を知るための手がかりをつくりたいという思いから生まれました。

ここで本書の構成を紹介します。本書は全部で6つの章からできています。それぞれの章のくわしい内容は、各章の最初にある概説ページに譲り、ここでは、各章の内容を簡単に紹介します。

第1章「『ひとりじゃない』ことがわかる本」は、本書の入り口となる章です。最近の、当事者が書いた本（「カミングアウト本」「当事者本」などと呼ばれる本）をあえて避け、歴史を横断するかたちで「ひとりじゃない」メッセージを送ります。

第2章「LGBTってなに？の疑問に答える本」では、いわゆる「解説本」にとらわれずに、セクシュアリティ全般を見わたす本をとりあげています。

一方、LGBTなどという概念のない昔から現在に至るまで、多様な性をもつ人々は、古今

東西を問わず、たくさんの文学作品やサブカルチャーと呼ばれる作品に登場しています。第3章「LGBTとカルチャー」では、そのほんの一部を紹介しています。

また、「多様な性」を生きる人々は「多様な生」を生きる人々でもあります。第4章「暮らし、健康・医療について考える本」では、そんな人々の生き方から「普通の生」を問い直す、普通で、ってなんだろうと考えるヒントを得ていただければと思います。

第5章「より深く知りたい人のために」は、本書のなかでも肝となる章です。今、「新しい」とされている考えも、実は先達が切りひらいてきた地平の上にあります。今起こっていることや論じられていることがどこから来たのか、今私たちはどこにいるのか、そしてどこへ向かっていくのかを考えるためには、避けて通ることができないと思われる本をとりあげました。

第6章「サポートする人に読んでほしい本」では、具体的にLGBTと接する人々にぜひとも知っておいてほしい知識を紹介するもの、LGBTをとりまく社会について書かれたものにとりあげました。これらの本を通して、この社会のありかたそのものを問い直すひとつのきっかけになればと考えました。

本書は、いわゆるブックレビュー集ではありません。執筆者一人ひとりには「人生」という旅の途中で「本」と出会い、その「本」の影響を受けて、さらに「旅」を続けていきます。本書は、そんな「Tour Book」と言えるでしょう。願わくば、本書を手にとられた方も、新たなTourに出してほしい。そんな思いを込めて、本書を贈ります。

では「Lovely Great Book Tour」のはじまりです！